

平成27年度 徳島県立ひのみね支援学校「学力向上実行プラン」

徳島県立ひのみね支援学校長

1 学力向上検討委員会構成

学 力 向 上 検 討 委 員 会		
	職名・校務等担当名	氏名
管理職	校長 教頭	田上幸志 森住俊子, 鎌田啓通
学力向上推進員	教諭(高等部教務主任)	増田良太
委員	指導教諭(企画総務課長) 教諭(学部主事) 教諭(進路指導主事) 教諭(教務課長) 教諭(教務主任)	中田聖子 (小)中村敏恵 (中)四宮美和子 (高)宮城利恵 佐藤和幸 山田千代 (小)徳重有紀 (中)久米清一 (高)増田良太

2 学力・学習状況における現状分析, 目標等

【3つの視点】

- (1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- (2) 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成
- (3) 主体的に学習に取り組む態度の育成

(I 類型) 児 童 生 徒 の 状 況		
よ さ	学習に対して意欲的であり, 自信が持てれば態度や発言が主体的になる。	課題 肢体不自由による認知特性(視知覚, 抽象的思考のつまずき等)から基礎的学力に弱さが見られる。コミュニケーション面では受け身になることが多く, 主体的に話すことが少ない。また, 自分の気持ちをうまく相手に伝えることが苦手である。
具体的目標(目指す子どもの姿)	成果指標	達成状況
<p>【小学部】 困ったときや不快なときに, 周囲の人に言葉やカードなど個々の方法で自分から伝えることができる。</p> <p>【中学部・高等部】 社会生活を送るうえで, 必要なことや自分の意思を相手に伝えることができる。</p>	<p>①国語や算数の問題に答える場面で, 担任に「わからない」ことを10秒以内に伝えることができる。 ②困ったときに, 自分から「手伝ってください」等と言葉で伝えることができる。 ③担任外の教員が足の装具を着けるときに, 不具合を言葉で伝えることができる。</p> <p>①作業的な学習や店や公共施設の利用に際して, チェックリストの依頼・質問に関する項目で, 「よくできた」「できた」の自己評価の割合を80%以上にする。 ②障がい者支援施設の見学の際, 職員に質問をすることができる。</p>	<p>【小学部】 ①わからない問題の時には, 担任に5秒以内に「わからん」と伝えることができた。 ②困ったときに毎回「手伝ってください」「取ってください」等言葉で伝えることができた。 ③装具を着けるとき担任外の教員に「きつい」「ゆるい」「入ってない」等言葉で伝えることができた。</p> <p>【中学部・高等部】 ①作業的な学習や, 校外学習の反省をした際, 依頼・質問に関する事項について, ほぼ全ての機会において, 「よくできた」「できた」と答えることができた。 ②施設見学の際, 疑問に思ったことを質問することができた。</p>

具体的方策(教員の取組)	取組指標	取組状況
<p>【小学部】 それぞれの児童の特性を踏まえ、関わる教員全員が共通理解を持ちながら、意欲的に伝えようとする雰囲気を作る。</p> <p>【中学部・高等部】 校外に出て、級友や教員以外の人と接し、必要なことや自分の意思を相手に伝える機会を多く設ける。</p>	<p>①「わかりません」カードや装具の不具合を伝えるための選択肢カードを提示し使用していく。カードと一緒に言葉も添える。</p> <p>②日常生活の中でいろいろな困る場面を設定し、「手伝ってください」等頼む状況を1日1回作る。</p> <p>①作業的な学習では、毎時間、必要なことを伝えたり質問をしたりする場面を1回以上設ける。</p> <p>②年間10回以上、店や公共の施設に行く機会を持つ。校外に行く前の授業ではロールプレイ等でシミュレーションを1回以上行う。</p>	<p>【小学部】 ①カードを提示し言葉も一緒に言うように担任と練習をした。言えるようになったらカードをなくしていった。</p> <p>②朝の活動で靴の履き替えをする場面で「靴を取ってください」と教員に頼む状況を毎日設定した。できるようになったら他の場面でも困る状況を設定した。</p> <p>【中学部・高等部】 ①必要以上の支援を控え、新たな作業を取り入れることにより、生徒が毎回質問できる場面を設けることができた。</p> <p>②年間10回以上、店や公共の施設に行く機会を持つことができた。毎回、事前学習でシミュレーションをしたことに加え、校外でも、まず教員が相手とコミュニケーションを取る様子を生徒に見せるよう心がけた。</p>
* 中間期の見直し		
達成状況を踏まえた改善事項		
<p>自分の意思を相手に伝えられるようにする、という明確な目標を持ち、個々の児童生徒に応じた手立てで指導を行った結果、それぞれに成果が見られた。課題を再検討しながら、今後も引き続き生活の中で活用できる学力を育てていきたい。</p>		

評価 A

(Ⅱ～Ⅳ類型) 児童生徒の状況

よさ	学校生活の中で、持てる力を発揮しながら学習に取り組んでいる。興味のあることに対して、取り組むことができる。	課題 重複障がいにより、外界を捉える力や表出する力が弱い。健康面や運動面での制約があり、生活経験が限られている。身体機能面での障がいのため表現方法が少なく、誰にでもわかるようなコミュニケーション手段の獲得が課題である。	
具体的目標(目指す子どもの姿)		成果指標	達成状況
児童生徒の実態に応じたコミュニケーション課題に取り組み、生活に活用できるコミュニケーション力を身に付ける。		コミュニケーション課題に関する個別の指導計画の目標で「目標に十分達した」、「目標に達した」という評価を80%以上とする。	1年間のコミュニケーションに関する個別の指導計画において「目標に達した」以上の評価は、小学部88%、中学部87%、高等部92%、全校で89%得られた。 評価 A
具体的方策(教員の取組)		取組指標	取組状況
課題を達成するために教材教具の工夫や教員間の連携に取り組む。 * 中間期の見直し		①全児童生徒についてケース会を実施する。 ②コミュニケーション指導や支援機器に関する研修又は情報提供を年3回以上行う。 ③学部会にて共通理解を図る機会を3回以上持つ。	①個々のケース会を学期に1回ずつ実施し、コミュニケーションの目標や指導の手立てについて話し合った。 ②外部講師や職員による研修会等を年6回実施した。 ③小中学部ではコミュニケーション指導の目標や指導の手立てについて共通理解を図る会を1回実施し、指導体制を整えた。その後は、ケース会を中心に学期毎の評価等について情報交換を2回行った。高等部はケース会を中心に3回実施した。
達成状況を踏まえた改善事項			
身に付けたコミュニケーション力を学校生活全体の中で活かしながら、家庭や地域社会に般化する指導が課題である。そのためには、児童生徒の実態や目指す姿に基づきながら、1人ひとりに必要なコミュニケーション力を明らかにすることと、個別の指導計画を充実させながら、般化のための指導計画を教育課程に位置付けていくことが必要である。			